

## 「親ガチャ」と「努力」の折り合いを考える ～共生社会時代の「原因帰属」～

伊田 勝憲(本学教職研究科教授 臨床教育学、教育心理学)

2021年の流行語・新語として注目を集め、2023年の大学入学共通テスト(倫理)の出題でも話題になった「親ガチャ」は、もはや学校教育をめぐる理論と実践の両面で避けて通ることのできないキーワードです。例えば、保護者の収入と子どもの学力との相関を示す統計等により、人は自分で選ぶことのできない環境からの影響を受けているという認識が広がりつつあります。一方で、「努力」や気合・根性・自己責任等を重視する意見も根強く、ネットニュースのコメント欄などでしばしば論争になっている様子を見かけます。

おそらく、学校教育はこれまで最も「努力」の大切さを強調してきた場の1つでしょう。教職教養(教育心理学)のテキストにも出てくる「原因帰属理論」(成功や失敗の原因を何に求めるかが動機づけ等に影響する)においても、「運」ではなく「努力」への帰属が望ましい(意欲の高揚につながる)と言われてきました。しかし、「親ガチャ」に関する議論では、その前提条件、すなわちスタートラインをはじめとする競争環境が本当に平等と言えるのかどうか問われています。端的には、家庭の経済資本のみならず、文化資本(例:保護者の教養、蔵書、芸術、スポーツ、自然体験の機会etc.)によっても学校教育への馴染みやすきに有利・不利があること、加えて遺伝的要因(両親から半分ずつ受け継いだ組合せ)による才能の個人差も注目され、その中には「努力する才能」も含まれるという見方があります。さらに、遺伝的要因が環境の選択(どのような環境に身を置こうとするか)にも影響する面を考慮すると、「努力」は成功や失敗の「原因」というより、むしろ諸要因の「結果」であるようにも見えてきます。

こうした新しい視点に立脚すると、成功や失敗を単純に個人の「努力」に帰属することは困難になり、学校教育における「成績」「評価」の意味も揺らいでいきます。教師としては、児童生徒の頑張り(主体的に学習に取り組む態度、学びに向かう力・人間性等)を評価しているつもりでも、遺伝や環境に(偶然)恵まれてい

る程度を見積もっているに過ぎず、格差をさらに拡大させる(恵まれた人だけを勇気づけ、そうでない人に烙印を押す)面が全くないとは言い切れなくなります。

学力以外の面でも同様です。2022年12月に改訂された『生徒指導提要』では、生物・心理・社会(BPS:Bio-Psycho-Social)モデルによって児童生徒をアセスメントすることが例示されています。不登校等の生徒指導上の諸課題への対応においても、本人の「努力(不足)」という心理学的要因のみに帰属せず、内科的疾患等の生物学的要因(遺伝的要因も含む)や社会的要因(校内外の対人関係等の環境)との相互作用(偶然=ガチャを含む)を丁寧に見立てることが求められる時代に入りました。

歴史的な価値観の転換期を迎え、世代を問わず「努力」の価値をめぐる分断が生じつつある中で、教師として当面どう折り合いをつけたら良いでしょうか。心理学では古くから「基本的帰属錯誤」、すなわち、人は自分の問題について環境からの影響を重視して言い訳しがちであるのに対して、他者の問題についてはその人の努力不足等に原因を求めがちであることが知られています。どの人も持っているこの傾向をメタ認知的に反転させて、自分に対しては「努力」が大事という価値観を許容(あるいは、努力できてしまっている境遇に感謝)しつつ、他者には「努力」を強要せず、一見「努力」していない人に対しては、「きっと複雑な事情・背景(ガチャ)があるはず」「目の前にいる自分(=教師)もその人にとっての環境要因に含まれる」という想像力・省察力を働かせてみる……このような(当面の)折り合いのつけ方はいかがでしょうか。

遺伝や環境という偶然で差別・排除されることのない「共生社会」とは、あらゆる問題を決して個人の「努力(不足)」だけで片付けない社会であるとも言えそうです。あなたも共生社会の実現に向けた新しい教職教養の構築を目指して、「努力」観や「原因帰属理論」のバージョンアップに参画してみませんか?